

過ぎた春の記憶

小川未明

青空文庫

正しょういち一 は、かくれんぼうが好きであった。古くなつて家を取り払われた、大きな屋敷跡で村の子供等らと多おおぜい勢せいでよくかくれんぼうをして遊んだ。

晩ばん方がたになると、虻あぶが、木の繁みに飛んでるのが見えた。大きな石がいくつも、足あしも許とに転がっている。其処そこで、五六人のものが輪を造つて、りゃんけんぽと口々に言つて、石と鋏はさみと紙とで、拳けんをして負けたものが鬼となつた。

鬼は、手拭てぬぐいで堅く、両りょう眼がんを閉められて、その石の間に立たされた。而そして他あとのものは、足音を立てずに何処どこへか隠れてしまった。

「もういいか。」

と、鬼になつたものが言ふと、何処かでクスクスと、隠れた者の笑い声が聞えて、

「もういいぞ。」

と答えるものがあった。すると、鬼になつたものは自分で、手を後方うしろにやつて縛つてやつた手拭をはずした。而して、しばらく其処に立つて、何処へ隠れたかということを考えて、

その方へと行つた。

隠れているものは、みんな、鬼の来るのを怖れて見つかりはせぬかと、竦んでいた。鬼は眼をきよろきよろさせて、熊笹の繁つた中や、土手の蔭などを一つ一つ探ねて歩いた。而して、頭が、ちよつと出ていたり、着物の端などがちよつと見えると、鬼は、安心してしまつて、わざと気の付かないような風をして、

「何処へ行つたらう……何処に隠れているだろう、ここでもない。」

などと口で言つて、わざと彼方へ行くような振りをして見せて、横目でちよつと此方の様子を見ろんで見る。

此方の、見付けられたと思つたものは、やつと心のうちで、これはいいあんばいに、助かつたと思つて、まだ胸をどきどきとして息の音を殺している。

すると、彼方へ行きかけた鬼は、また此方へうかうかとやって来て、直ぐ、その頭の見えている者の間近に来て止つた。

見つけられたと思つたものは、急に頭から冷水をかけられたような気分がして、穴があつたら地の中へ隠れたいと思う刹那、

「見つかつた！」

と鬼は叫んで、直様すぐさま、その者を捕えてしまった！

二

正一は、この子供等の中でも、どちらかといえば臆病な子供であつた。而して鬼になるより、隠れる方が好きであつた。

彼は、見つかつた！ と頭の上で言われる時には、身がぶるぶると戦ふるえるように、ぞつとするのを覚えた。藪の中に隠れている時、鬼が此方に歩いて来る足音がガサガサと聞えると、もう身の毛がよだつて、耳が熱ほてつて、心臓がどきどきした。而して、或時は、自分から、居いた堪たまらなくなつて、やあ——と死に物狂いに叫んで藪の中から飛び出ることもあつた。

ある秋の晩方であつた。白い夕靄ゆうもやがうすくぼんやりと降りて、彼方かなたの黒ずんだ杉林に、紅く夕日が落ちた時分であつた。村の子供等は、いつものように古い屋敷跡に集つた。この屋敷は、村の端はずれにあつて、昔は、五百石取りの武士さむらいが住んでいたところであつたが、いろいろと仔細があつて衰微してしまつて、その家は、古びて遂にこの程、取り壊された

ので、その屋敷跡には、古い空井戸からがあつた。また地形石ちぎよういしなどがその儘ままとなつていたり、家根石やねなどが転つていたりした。裏手には杉の木の林があつて、土手には熊笹くまざさが繁つていた。

子供等は、紅い沈んだ夕日を眺めていたが、

「おい、君等の中で幽霊を見たものはないかい。」

と一人がいった。

すると、一人は、「見たよ。」といった。

「何処で。」

「あの杉の木の中で。」

とその少年は、後方の紅い夕日の沈んだ森ゆびさを指した。

「どんなものであつたい。」

と、一人が言った。

「黒い着物を被きていたよ。而して頭きから何か被つていたよ。」

「而して、その黒い坊さんはどうしたい。」

「僕は、その坊さんに石を投げてやった。」

「何か物を言つたかい。」

「何処かへ消えてしまった。」

「何、それは幽霊でないよ、誰か、杉の枯枝を拾いに来ていたのだよ。君、幽霊なんかこの世界にありはしないよ。」

「うん、ありはしない。学校の先生が幽霊などありはしないといったよ。」と一人が傍そばから賛成した。

皆んなは、これで黙つてしまった。それから、またわいわい言つていたが、

「隠れんぼうをしよう。」

と、一人が言つた。

「しよう。」と、其処にいたものは、皆んな同意した。而して、また、石の転っている空地に輪を造つて、りゃんけんぼと言つて、拳に敗けたものは鬼になった。

その時、臆病の正一はこういつた。

「君、隠れる場ばしよ処をきめて置こうよ。」

すると、皆んなは、もう遅くて、暗くなつたから、彼方の桑くわばたけ圃ぼへは行かないことにしよう、この家敷まわりの周囲だけにしようといつた。

「じゃ、あの杉の木の森……。」と正一は言った。

「何、森がなくちや隠れる場処はありやしないじゃないか。」
と、一人が打消した。

三

やはり正一は、鬼にならなかつた。皆んなは、固^{かたま}つて逃げて森のところまで来た。鬼は、やはり眼隠しをさせられて、空地の、石の転っている処に彼方向きになって立っていた。

皆んなは、杉の森のところまで来ると、

「オイ、固つて隠れては駄目だ。直^{すく}に分つてしまうから、皆んな分れて隠れようよ。」

と、一人が発議した。皆んなは、「そうだ。皆んな別々に隠れよう。」と、それぞれ隠れてしまった。

もう、夕靄が一面に下りて、森の下は暗くなつて、少しも見えなかつた。紅い夕日は、僅^{わず}かにほんのりと遠くの地平線に余炎^{よえん}を残していた。黒く人のように立っているものがある。それは、木の枝が固つているのであつた。正一は、自分独りになってまごまごと隠れ

るところを探していた。

先刻、幽霊の話聞いたので、日頃から臆病であったから、独りで隠れる気にはなれなかつた。

正一は、こう思った——もし、自分が鬼になれや黙って帰れない、若しも鬼になって、黙って家に帰ると明る日、皆んなからいじめられるから、鬼にならないうちに家に逃げて帰ろうかとも思った。しかし、今から、家に帰ろうとしても、鬼に見付けられてしまうだろう……こう考えながら、森の中をうろうろしていた。大きな、黒い杉の木の前には、青い苔の生えているのが白くなって見えた。また、女の頭髪かみのけの乱れたような蔦つたなどが下つているところもあつた。赤い、烏からすうり瓜の吊下つているところもあつた。

何だか、黒い、暗い頭の上から、誰か覗いているような気がして、独りで、藪の中に竦んでいることが出来なかつた。

このとき、鬼は、

「もういいか。」

と、叫んだ。その方を振向くと、夕靄の中に立って、眼を隠している友の姿がぼんやりと見えた。

「ま——だ——だよ。」

と、一生懸命で正一は、せつなそうな声を出して叫んだ。

すると、彼方の黒くなつた藪の蔭から、

「何しているんだ。早く隠れれよ。」

という声があった。

正一の気は、焦立^{あせ}つて、こうしていることが出来なくなつた。

彼は、まごまごしてうろついている訳には行かなくなつたので、自分独り、何処か他にいい処はないかと四辺^{あたり}を見廻して、森から他の場処を探した。

何処を見ても、眼を遮るようなものがなくて、ただ、この癩^{くさ}れ果てた空屋敷の跡には夕靄^{あせ}がぼんやりと白くかかっているばかりであつた。

正一は、仕方なしに地面の上に臥^ねている訳にも行かないような気がして、気の急いでいる刹那に、ふと空井戸のあることに気がついて、早速其処に走つた。

四

空井戸の中を覗くと、真暗まっくらであった。けれど、彼は、その井戸はいつかいろいろのもので埋うっていて、其様そんなに深くないことを知っていた。

中には、水がなかつたけれど、落葉が溜たりつてきて、湿気ばんでいた。而して井戸の周囲には、苔が生えて、夜の靄もは、この中から浮き上るように天上の方はぼんやりと霞かんでいく。

落葉の匂においが、冷ひやかに鼻びに浸ひみだ。正一は眼を上の方に向けていると円い穴は、直に青い空を円く限かっている。ちょうど井戸の上は、青い空に掩おわれているように、他に何も見えなかつた。

眼を上に向けて、もしや、鬼が来て、この中を覗のぞきはしないかと仰あいでいたけれど、誰も来て覗のぞいて見るものもなかつた。

その内に、ちらちらと星の輝くのが見え始めて来た。彼は、たとえば誰が来て、上から下を覗のぞいても、中は真暗で見えないから見つかる気遣きいはないと思おもっていた。

彼は、耳を澄すめていたけれど、何の声も聞えなかつた。もう、今頃は、誰かが見付みつた時分であろうと思おもつたが、皆んなの叫わめく声も聞えなかつた。彼は、尚なお声を潜ひそめて、黙もくつて、若しや鬼がこの上の辺りを通とっているのではないかと思おもっていた。

空の色は、ますます青く冴えて、星の光りがはつきりと澄み渡って来た。

彼は、何となく心細くなったので、

「もう、いいぞ。」

と、井戸の内から叫びた。

その声は、穴の周囲に突き当って、上の方へは聞えなかったようだ。彼は、こう叫ぶと誰か来て覗きはしないかと、胸をどきどきさして竦んでいた。

自然に崩れて落ちる土の塊りが、ころころと転げて来て枯れ葉の上に落ちた。彼は、出て上を覗いて見ようと思った。

正一は、足を井戸の周囲に踏みかけた。けれど手に掴まる処がなかったので、容易に上ることが出来なかった。彼は、爪で、土を崩した。而して、其処に足をかけて、やっと片手を穴の上にかけることが出来た。

こんなことをする間にも、時間は余程たって、彼は、幾たびか上りかけては、下に落ちて穴の中で、尻餅を搗いた。而して、やっと土に塗みれて、井戸の上に出て見ると、もう、誰も、空地には居らなかつた。

四辺は、眠ったようにしんとして、彼は、言うにいわれない頼りない悲しい感じがした。

まだ四つか五つの時分、母が使にでも行つて居なくなつた時分がふらふらと浮んだ。ちよ
うどその時のような怨めしい、やるせない思いがした。心のうちで何時の間にも皆んなは帰
つてしまつたのだらうと怪しまれた。見渡す限り、白い夕靄がかかつている。その中に、
黒い森が、ぼんやりと浮き出ている。彼方の圃には、ひよろひよるとした枯れた木が立つて
いた。

正一は、まだ誰か、その辺に残つて居りはせぬかと、彼方、此方見廻しているうちに、
誰か一人、十五六歩も隔つて、白い靄の中に悄然として佇んでいるものがあつた。

「オイ、誰だい君は。」

と、正一は呼びかけて、その方に歩いて行つた。

五

月が森から上つた。

あたりは、急に明るくなつた。

「オイ、君は、誰だい。」といつて、正一は、立っている人の傍に寄つて、顔を覗いた。

頭から、黒い布きれを被っている人は、黙っていた。正一は、びっくりした。けれど、誰かこんな真似をして、皆んなは隠れて、自分をおびやかそうとしているのではないかと思っただから、

「オイ、君は誰だい。」

と行って、その黒い人の前に立った。

けれど、その人は、やはり黙っていて返事がなかった。而して、あたりは余り静かで、しんとしているのでなんだか身に寒気を覚えて、変な気がして来た。

この時、立っている人は、始めて頭から黒い布をはずしたのである。

月の光りに見ると、白髪しらがの坊さんであった。やはり身に鼠色きものの衣物を被っていた。

正一は、一目見て、この坊さんは、或時、何処かで見たとのことのあるような、微かな記憶が不思議に浮ぶような気がしてならなかった。坊さんは、

「わしの顔を覚えていないか。」

といった。すると急に正一の頭は、はつきりとなって、いろいろの過去のこと考え出された。

「去年の、春の日であったが、お前を見たことがある。」

と、坊さんは言った。

正一には、すべてがはつきりと分つた。ちようど桜の花の咲く頃の事であった。あの日の晩方、家の前に立つていると、あちらから、一人の旅僧が歩いて来た。その日は、朝のうちから、曇つて、一日花曇りに日は暮れてしまうような穏かな日で、遠くでは、寺の鐘がゆるやかに鳴つて聞えた。正一は、死んだ祖母のことなどを思い出していると、一人、草鞋わらじを穿はいて、びしやびしやと歩いて来た旅僧は、家の前を通り過る時に、ふと、自分の顔を見てにつこりと笑つた。白髪かの皺おの寄つた顔か貌おが、何んだか死んだお婆あさんに遇つた時のように懐しく思われた。正一は黙つて、そう思いながら、不思議かそうおな顔お付つきをして、旅僧の顔を仰いで見ると、

「大きくなつた。また来るよ。」といつて、その旅僧は行つてしまつた。正一は、家に入つて、そのことを母親に話すと、人違いだろう……お前に、そんなことをいう筈はない……あまり、可愛らしいから、そういつたまでだろう……これから、知らぬ人が、いい兎うだから私と一しよにお出でなどといつても行つてはいけないといつた。

今、自分の前に立つている坊さんは、その時の坊さんであつた。

「覚えている。」

と、正一は心の裡うちで言った。

星の光りは、秋の冷たい空気の中に染にじんで、鼠色の衣物を着た、坊さんの眼は水晶のよ
うに光つて見えた。

「わしは、お前を見ようと思つて来た。」

と、その坊さんは言った。正一は母の言葉を思い出していっしょに行つてはいけな
いと思つた。帰る時、坊さんは、正一を家の近くまで送つて来てくれた。

正一は、病気にかかつて床についていた。今、夢から醒さまされた。眼を開けると、母親や、
親類の人々が心配そうな顔付をして自分の顔を見ながら枕許まくらごに坐つていた。

——春の晩方くれがた、桜の咲はないている寺へお詣りに来た。沢山の人がお詣りに来ている。中
には、もうこの世を去つた人で、見覚えのある老婆もあつた。自分は、死んだ祖母に手を引
かれて堂どうに上ると彼方に、蠟燭ろうそくの火が揺ゆいでいる。其処の一段高い、天蓋てんがいの下には、
赤い袈裟けさをかけた坊さんが立たつていた。あまり、人々の念仏の声などが、鐘の音などと入
り混まつていて、坊さんの言いつていいることが分わらなかつた。

その坊さんは、なんだか見覚えのあるような気がしてならなかつた——。

医者が来て帰った。その診察によると、もう、正一は、二たびかくれんぼうをすることが出来なかった。

青空文庫情報

底本：「文豪怪談傑作選 小川未明集 幽霊船」ちくま文庫、筑摩書房

2008（平成20）年8月10日第1刷発行

2010（平成22）年5月25日第2刷発行

底本の親本：「定本 小川未明小説全集1 小説集※〔#ローマ数字1、1-13-21〕」講談社

1979（昭和54）年4月6日第1刷発行

初出：「朱戀」

1912（明治45）年1月号

入力：門田裕志

校正：坂本真一

2015年9月24日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られ

ました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

過ぎた春の記憶

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>